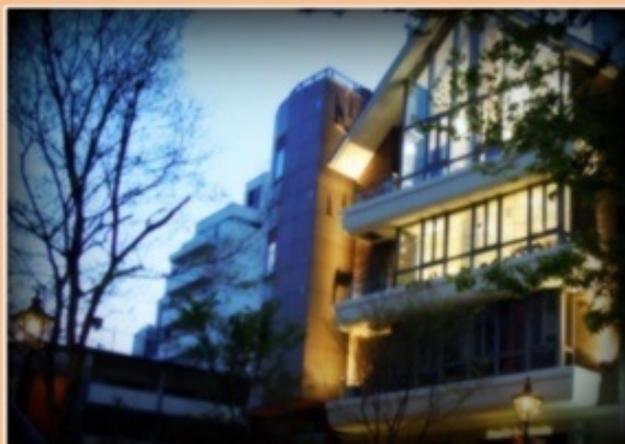


いつか、どこかで。

—序章—



すれ違っても
きっとまた会える
僕らが見上げる空は
ひとつだから—。

by Threelines

since 2014.8.3

あかりと歩く夜の馬車道が好きだった。

蒼い街灯に照らされるあかりの横顔は記憶の中でいつも濡れている。それは夜露でもなんでもなく、彼女の涙のせいに外ならない。

あまりにも突然結末を迎えた僕らの恋。

思い出の大部分を洪水のように呑み込んでしまった最後の夜の出来事を、僕はまだ引きずっている。

湧き上がる想いは、すぐ葬り去るようにしているが、時々失敗する。

繰り返し、繰り返し。

数えてみればかれこれ5年が経過していた。

そう、5年前一

瀟洒な街並みを2人で迷い込むように進んでゆく。気分は高揚し、まるでタイムスリップでもしたかのようだ。一ここは大正、鹿鳴館。今宵のダンスはいかがでしたかー。

街全体が、まるで僕らをセピア色の薄い膜で包んでくれているようだった。

時折、奇妙な感覚にとらわれた。いつもメールや電話の向こう側にいた彼女が、本当に今、目の前にいる彼女なのかと。艶めかしい息づかい、小さく柔らかな指の温もり。その存在感は、文字や音声には表れないしっとりとした空気を運んでいた。

愛してる、

愛してる。

そうやって僕はどうしようもなく、あかりのことが欲しくなるのだ。

あの日、あかりは、ショーウィンドウごしにウェディングドレスを眺めながら切り出した。

あるいはショーウィンドウに映る自分たちを眺めていたのかもしれない。

「私たち、いつもこうじゃない？夜になって会い、朝になって別れなきゃならないなんて。なんだかそれだけのための逢瀬みたい。」

「しょうがないだろ、お互い仕事が忙しいんだから。」

彼女の言いたかったことは明白だ。

僕たちは会うたびに愛を交わし、その後に夜の散歩をした。

あるいは散歩は、彼女にしてみればとってつけたような儀式に思えたのかもしれない。確かに僕は、用意されたシナリオを、ただ辿っていただけだ。おまけに彼女は楽しんでいるのだと高をくくっていた。

すれ違いというのはいつも後で明らかになる。僕らは今を楽しみつつも、未来に怯えていなければならないのかもしれない。

共有した思い出は山ほどある。でもそれがなんだというのだ？

終わったことは何度も振り返ってはならないという暗黙のルールが大人の関係であるならば、それはあながち間違っていない。

路地裏でみた猫の喧嘩や、山下公園に佇むカップルの観察、何より、一つ一つの出来事に一喜一憂するあかりの横顔。そんなひと続きの思い出はあの夜を境に崩壊し、哀しい記憶に上書きされたのだから。

「私たち、別れましょう。」

「ん？悪いジョークだな。」

「ジョークでもなんでもない」

凜と構え、まっすぐに僕を見据え、月明かりに浮かびあがる彼女は哀しいほどに綺麗だった。僕はどんな顔をして彼女の顔をのぞきこんだのか？

不意にぽろぽろと彼女の頬に涙が伝いはじめた。

胸に去来する「なぜ」をもてあまし、僕は明らかに狼狽していた。

「ごめん、泣いちゃったりして。でもね、最後は笑顔でさよならがいいと思うの。」

「意味が分からない。どういうことなんだ...」

「...」

「なんだよ」

「私たちには未来がないじゃない。」

僕はその瞬間、未来に思い描いていたあかりとの幸福な生活をすべて反古にし、新しい何かに備えるべきだったというのか。それができれば少しは傷も浅かったのだろうか？

しゃがみこむあかりに視線を向けると、彼女はおもむろに僕の靴に手をのぼし、ほどけていた靴ひもを結んだ。

それが僕に対してできる、最後の心遣いだと言っているようだった。

彼女の優しさが鋭利な刃物のように胸に突き刺さる。

「ちょっとまってくれ。お金がないからか？言ったじゃないか。幸せは自分たちで作り上げるも

のだって。いまは忙しいけどなんとかなるって」

「ごめん」

「それにひどいじゃないか、未来がないって、どういう意味だよ。」

「ごめん」

「あきれる。ちょっと頭冷やしてくれないか？」

「ごめん、でももう限界だから...」

「何が...？」

「ごめんね、私はあなたを幸せにできない。でもあなたのことを幸せにできる人は絶対にいる。私がその人ではないだけ。ごめん。他に好きな人ができたの。」

あかりは決してチャラチャラとした尻軽女ではない。無論、かまととぶった悪女でも決してない。

が、すぐにはわからなかった。

彼女の真意がどこにあるのかを。

彼女の最後の嘘が、どれだけ彼女自身を追い込んだのかも。

次の瞬間、彼女は、力なく地面に倒れこんだ。

「あかり！」

【喪失】

どこまで人を好きになれば人は人を愛したことになるのだろう。
胸のうちにある彼への想いは確かなものだと思う。
けれど例えばその想いが自分の命と引き替えに成就するものだとしたらきっと躊躇ってしまう。
そんな自分がたまらなく卑小だと感じる。

章吾。どうすればいいのよ。
私には赤ちゃんができたわ。3ヶ月。もちろんあなたの子よ。
産みたいわ。あなたもそれを望むに違いない。
だけどね、お医者さんが言うの。
つまり、私の命の方が危ないって。
きっとこの子は産まれてきた暁にあなたへの想いを代弁してくれる。
でもやっぱり死ぬのは怖い。
ここまで自分を責めたことは私にはあまり経験がない。
免疫がないのかしら。いい子ぶりっこだと言われても仕方がないわね。

真実を知ったとき、あなたの気持ちが揺らいでしまうのが怖い。
たとえ愛してると言ってくれてもきっと辛い。
それはきっと別れの辛さに匹敵するもの。
私は弱い人間です。
だからあなたを愛する権利はないの。
あなたのもとをそっと離れようと思う。
それがたぶん、一番だと思うから。

バイバイ、章吾。
馬車道ってとてもいいところよね。
不器用だけど、そういうところにはとても気の利くあなたが今、たまらなく愛おしいの。
いつかおじいちゃんおばあちゃんになったらどこかであなたに会ってみたい。それを楽しみに、
私は生きてゆこうと思う。
子供の産めない私はきっと独りぼっちになるから、せめてその時には優しくしてね。

いつか、どこかで。一序章一

一週間更新を予定しておりますが、予定は未定です。

<http://p.booklog.jp/book/88636>

著者 : threelines

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/threelines/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/88636>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/88636>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ